

Ⅲ 自己評価

基準 1. 建学の精神・大学の基本理念及び使命・目的

1-1. 建学の精神・大学の基本理念が学内外に示されていること。

≪ 1-1 の視点 ≫

1-1-① 建学の精神・大学の基本理念が学内外に示されているか。

【1-1. 事実の説明】

1 現在、学内では次の方法で、建学の精神・大学の基本理念を公表し、周知徹底を図っている。

(1) 学生便覧

毎年4月に学部・大学院の新入生ならびに教職員に配布している。

(2) 聖典聖歌集

建学の精神・学園訓・経典・学園歌などが記載された冊子で、それらの周知・浸透を図るため、常に接することができるよう携帯可能なサイズにし、全学生・全教職員に配布している。自らの人格完成を目指し学修の心構えと態度を身につける授業である礼拝（「仏教 I～IV」）において、聖典聖歌集の携帯を義務化している。その中で、般若心経の読経や写経を通じて心を集中させ、仏教の教えに心を向けることにより、その意味を理解することで、建学の精神の体得に努めている。

2 学外へは次の方法で、建学の精神・大学の基本理念を公表し、周知を図っている。

(1) 大学案内

建学の精神、大学の基本理念、アドミッションポリシーなど本学の特色を記載した総合案内冊子で、それらを周知するために、受験生や高等学校、一般、企業等に幅広く配布している。

(2) ホームページ

建学の精神、大学の基本理念、アドミッションポリシー、本学の最新情報などを掲載、随時アクセスでき、受験生のみならず教育関係者、一般社会人などを対象に、インターネット上でリアルタイムな情報を公開している。

(3) 募集要項

学生募集のために入学試験の必要事項を記している募集要項にも、建学の精神、大学の基本理念などを明記し、受験生や高等学校・予備校などへの周知徹底を図っている。

(4) ロゴマーク



※国際的に開かれた「和」の精神を仏教教育によって育成することをデザインポジションとしている。

※IBUの頭文字であるI部分の5本のラインは、学園訓を表している。

一 和を以て貴しとなす

一 四恩に報いよ

四恩とは国の恩、父母の恩、世間の恩、仏の恩なり

一 誠実を旨とせよ

一 礼儀を正しくせよ

一 健康を重んぜよ

※インパクトと信頼性さらに、男性的、女性的という偏りのない学園のイメージを形成している。

International Buddhist University の略称“IBU”をデザインしたもので、これは建学の精神・基本理念を視覚的に表現したものとなっている。広報物、印刷物等をはじめ、本学の名称を記載する場合には、この略称と校名を併用することで建学の精神を広く示している。

(5) 学報

「IBU-NEWS」を在学生ならびに在学生の保護者、そして卒業生、高等学校、他大学に広く配布している。学報には、本学の教育理念や現在本学が取り組んでいることなどを広く知らしめることで、本学への理解をより一層高めている。

【1-1. 自己評価】

本学の建学の精神および使命・目的は学則に明確に定められ、在校生はもとより、新入生や教職員に深く理解されていると判断できる。大学案内には大学の基本理念が明記されており、毎年4月に新入生や教職員に配布する学生便覧においても、建学の精神、使命・目的が記載されている。また実践的には、学生と教育職員は授業である礼拝（「仏教I～IV」）にて読経や写経、仏教の教えを理解し、授業開始前の瞑想で心を集中させている。事務職員は毎日の朝拝にて般若心経を読経し、就業前の心の集中に務めている。

このように本学では、建学の精神が日々問われており、研鑽を通じて必然的に建学の精神を自然と体得しているものとする。

【1-1. 改善・向上方策】

本学の学生は、深遠なる知識と行動力を養う他に、授業である礼拝（「仏教I～IV」）の読経や写経、授業開始前の瞑想など、実践行を通じて体得した「慈愛の心」が広く社会から認められている。それは本学卒業生が企業において、このような観点から高い評価を受けていることから明白である。

従って、現在の努力を継続しつつ、本学が目指す「未来に尽くす人材」の育成、すなわち、他者への深い理解と共感を持ち、「社会を動かす人材」「時代をつくり上げる人材」を育てあげるという目標を、学外により一層広めていくことが必要である。

1-2. 大学の使命・目的が明確に定められ、かつ学内外に周知されていること。

《1-2の視点》

1-2-① 建学の精神・大学の基本理念を踏まえた、大学の使命・目的が明確に定められているか。

1-2-② 大学の使命・目的が学生及び教職員に周知されているか。

1-2-③ 大学の使命・目的が学外に公表されているか。

【1-2. 事実の説明】

1-2-①

本学の使命・目的は、「聖徳太子が四天王寺を創建された精神に基づき、教育基本法および学校教育法に則り、深く専門の学術を研究教授し、現代社会において必要とされる知識を広く授け、もって仏教精神を修得して人々の幸福のために献身し、豊かな教養とすぐれた知見をもち、我国はもとより国際社会に貢献しうる有為の人材を育成することを目的とする」と、学則の第2条で明確に定めている。

1-2-②

現在、次の方法で、建学の精神・大学の基本理念を公表し、学生および教職員への周知を図っている。

(1) 学生便覧

学部・大学院とも毎年4月に、建学の精神、教育方針のほか、学則第2条の大学の使命・目的等を明記した学生便覧を、新入生と教職員に配布している。

(2) 授戒

学生は入学後、教職員は採用後、四天王寺の五智光院で、建学の祖である聖徳太子の仏教精神に基づいた授戒会に参加する。授戒は、本学の特徴である仏の教え(戒)、智慧を授かり、それを守り、学ぶことを誓う厳粛な行事であり、本学における初めての実践行である。これは信徒になることを強制するものではないが、建学の精神を常に心にとどめ、よりすぐれた人格の育成に励むという学生、教職員の意識の向上に大きく寄与している。

(3) 礼拝(「仏教Ⅰ～Ⅳ」)

本学建学の精神に基づく教育の中核として、最も重視されているものである。授業の一部としての礼拝は、聖徳太子の教えに対する尊敬の念を形として表現したもので、献灯に始まり、般若心経などの読誦、瞑想、聞法(学習)や写経、聖歌斉唱などからなる。礼拝は毎週、学期期間中に行われ、1・2年次の全学生と全教職員が出席するもので、学生にとっては必修科目でもある。

一方、事務職員に対しては毎朝の就業前、般若心経を読誦し、スピーチなどを行う朝拝を行っている。

こうした実践行を通して、本学の使命・目的が、学生や教職員へ周知徹底されるよう努めている。

1-2-③

本学の使命・目的は、次の方法で学外へ公表し、周知を図っている。

(1) 大学案内

本学の総合案内冊子である大学案内では、その時代に沿った形で建学の精神・理念を表現し伝えている。本冊子は、受験生はもとより、一般、企業にも広く配布され、建学の精神・理念以外にも教育内容、学生支援等を伝えるものとなっている。

(2) ホームページ

建学の精神、大学の基本理念、アドミッションポリシー、本学の最新情報などを掲載、随時アクセスでき、受験生のみならず教育関係者、一般社会人などを対象に、インターネット上でリアルタイムな情報を公開し、本学の使命・目的の周知徹底を図っている。

(3) ロゴマーク（※デザインは【1-1. 事実の説明】参照。）

本学の略称“IBU”をデザインしたロゴマークは、「国際的に開かれた『和』の精神を仏教教育によって育成する」という建学の精神・基本理念を視覚的に表現したものとなっている。このロゴマークはあらゆる広報物、印刷物に記載され、本学の使命・目的を視覚的に伝えている。

(4) 生涯学習講座

本学のキャンパスと知的財産を広く地域に開放し、生涯学習講座であるオープンカレッジや公開シンポジウムを開催している。大阪の梅田にサテライト講座として「たいし塾」を開講している。さらに、平成21年4月に四天王寺大学藤井寺駅前キャンパスを開設し、本学の新しい拠点として、更なる生涯学習の場を提供している。年齢を問わず、本学建学の精神・理念を踏まえ、仏教精神を中心とした社会人教育活動を積極的に行うことで、学外にこれを広く知らしめている。

(5) 学報

「IBU-NEWS」を在学生ならびに在学生の保護者、そして卒業生、高等学校、他大学に広く配布し、学生本人や保護者および卒業生などに、本学の建学の精神を継続的に周知徹底している。

【1-2. 自己評価】

本学の使命・目的は、学則で明確に定められ、学生便覧、ホームページ、大学案内、生涯学習講座等の全ての媒体を通じて、学内はもとより学外へも広く周知されていると判断できる。今後は、本学の使命・目的をより広範囲に周知できるよう、学生や一般社会に対する告知活動を増加させるなど、さらなる周知徹底が必要である。

【1-2. 改善・向上方策】

大学の使命・目的はよく周知されており、今後とも現在の努力を継続していきたい。また、建学の精神および使命・目的と実践行との結び付きについて、学生や教職員へさらなる理解を図り、積極的な参加を得られるよう努めていきたい。

【基準 1. 自己評価】

本学では、授戒、礼拝、授業前の瞑想などの実践行を通じて、建学の精神を体得する。なかでも礼拝（「仏教Ⅰ～Ⅳ」）は学生にとっての卒業必修科目であり、教育職員全員の出席が義務づけられている。また、聖徳太子の教えに対する尊敬の念を形として、授業開始時の瞑想や師弟の礼を行うなど、落ち着いた心で自身の内面を見つめる時間を与え、他人を敬う精神を浸透させる場を教育の現場においても設けている。学内には、聖徳太子をモチーフとしたレリーフなども設置され、日常的に聖徳太子にふれる場を用意している。

従って、本学の建学の精神は、これらを通じて必然的に身に付き、学生ならびに教職員に深く理解されていると評価できる。これらの深い理解を基に、現在の努力を継続しつつ、他者への深い理解と共感を持ち、未来に尽くすという本学の理念につなげている。

【基準 1. 改善・向上方策】

実践行のひとつである礼拝（「仏教Ⅰ～Ⅳ」）は、1年次生は瞑想、2年次生は写経を軸とし、それぞれ1,000人を超える学生（大学及び短期大学部）が一同に集まるため、開始時間の遅れや講話時の私語が目立ち、仏教精神を学ぶ場としての雰囲気形成に困難があることは否めない。

ただし、大人数で行うことは、お互いに影響を与え合い、力を合わすことでその力が大きくなるという「和の精神」の体得につながる。それゆえ、改善策としては、大人数合同の受講形式を踏襲しつつ、規律正しく行動することを学生に徹底指導する。講話時にはクラス担任や宗教委員など全教育職員による巡回指導を行う。その結果、学生各々が建学の精神を体得し、自らの責務を自覚することにより、本学の目指す「未来に尽くす人材」の育成につなげていきたいと考える。

本学が目指す「未来に尽くす人材」とは、「社会を動かす人材」「時代をつくり上げる人材」の育成であり、この目標を広範囲に周知できるよう、努めなければならない。